口一人当たり石高を指標としつつ，村内耕地と村外住民との関係を３つの型に分類整理している。尾張においてもっとも一般的に認められた型は，村内の耕地を村外住民が小作する形態であるという。最後に古村と新田を比較しながら給知率の差を検討している。

末尾には本文中で引用された文献一覧が掲載されている。これらはいずれも近世尾張の歴史地理を研究する際の基本的文献となろう。また索引が３ページにわたって掲げてあり，難読地名にはふりがなが付されている点も読者にとってはありがたい。

以上，本書の内容を章毎に概観した。本書では，豊富で多様な図的表現を駆使しながら分析がなされているので，主題図について若干の感想を申し述べたい。各所に挿入された村絵図から読みとられた当時の村の景観が的確に述べられている。本書は著書の既発表の論考を再構成する形でまとめられているため，図的表現の不統一さがないではない。例えば，人口一人当たり石高や水田率が，面積図で示されていたり階級区分図で示されていたりする。異なった地域での図的比較を行おうとした場合にはやや不便さを覚える。しかしこうした点はいうまでもなく本書の真価になんら影響を与えるものではない。著者の研究において評者が感心させられるのは，近世村の境界を入れた図をベースマップとされた点である。どのような方法で近世村の境界線を描かれたのかについては本書では触れられていないが，村別データの得られる尾張藩の研究にあっては，このような図は大変重宝である。なぜなら村の位置だけでは，密度図のような図を描くことができないからである。

近年，各地の市町村史などにおいて絵図を用いた研究が数多くみられるようになった。各地の歴史を描くことは，過去の地誌を描くことと深く関わることになろう。ただ時間の流れに沿って描かれる地域の歴史では味気ない。やはり地域の歴史を知るには，地域のある時間断面における地誌を描くことが重要ではなかろうか。本書もこのような意図を持って書かれているのではなかろうかと評者は推測している。

尾張藩には，ほぼ全域にわたって近世の地誌書が存在するとはいえ，それら資料を分析し再構成していくことは容易ではない。筆者の尾張藩に関する深い造詣をもってはじめて上梓可能な書といえよう。本書は尾張という一地域を扱ってはいるが，そこに書かれた内容は多様である。その多様さは，筆者の歴史地理学者としての豊富な識見を物語っている。本書は近世尾張藩の優れた地誌的研究書であるとともに，歴史地理学の教科書としても重宝するものとなっている。本書を読めば，藩政時代の知行制度のあり方，新田開発の諸形態，近世村の特色，農業や農間余業のあり方，交通制度，城下町とその都市化などおよそ歴史地理学が手がけるかなりの分野に関して，その知識を深めることができる。本書が尾張藩研究に大きな貢献をした書であるとともに，それでいて比較的平易で読みやすい書となっていることも最後に付記しておく。

（岩崎公弥）

高瀬　正著『埼玉県の近世災害碑』

ヤマトヤ出版（自費出版）　1996年８月
Ｂ６版　205頁（問合先：埼玉県比企郡小川町青山439，高瀬正，TEL0493-77-6443）

歴史地理学会の平成11・12年度の共同課題は「災害・防災の歴史地理学的アプローチ」である。そこでは第一線の研究者による歴史災害に関する最新の研究が次々に紹介されつつある。歴史地理学にとって歴史災害の研究が必要不可欠であり，きわめて今日的課題であることは，すでに広く認められているところであろう。しかし，必ずしも研究成果が蓄積されてきたとはいえない。それゆえに，今回の共同課題の設定によって，歴史災害研究の飛躍的な前進が期待される。

もちろん，歴史地理学界に歴史災害の研究がなかったわけではない。これまで指針を与え続けてこられたのは，歴史地理学における歴史災害研究のパイオニア菊池万雄先生である。『日本の歴史災害－江戸後期の寺院過去帳による実証－』・『日本の歴史災害－明治編－』（古今書院）などを世に問い，その後も「地震ジャーナル」などの雑誌に研究成果を公表してこられた。先生の徹底した資料所在調査に基づく緻密な実証研究は，単に災害の実態復原のみならず，寺院過去帳による死亡者の分析を試みられたことからもわかるように，つねに被災者への慈しみに満ちた眼差しのなかで歴史災害を論じられたのである。災害がなぜ起こったのかということよりも，災害によって何が引き起こされ，これに人間はどのように対処したかに，先生は強い関心を示されたといえよう。

菊池万雄先生は長らく日本大学文理学部地理学

教室にあり，多くの後進を指導し育て上げられた。本書を刊行した高瀬正氏も，先生の教え子の一人である。高瀬正氏は建設業に従事しながら，仕事の合間に自らの足で埼玉県内の災害碑を訪ね歩き，拓本をとるという地道な仕事を続けられた。今日の様々な研究手法から見れば，労多くして益少なしとの見方もあるであろう。にもかかわらず，災害碑の収集に熱意を注ぎ自費出版されたのは，「先人がいかなる災害に遭い，またそれにどのように対処したかを知ることは，私達の生きる方法にひとつの指針を与えることでしょう。」という序文に示唆されている。人間の英知に学ぶ，災害を克服していく人間の姿への熱い思い，恩師と同様，こうした環境可能論的なスタンスが本書を貫いている。

さて本書は，菊池万雄著『日本の歴史災害－江戸後期の寺院過去帳による実証－』の章立てにならい，洪水災害，気象災害，火山災害，旱魃災害，地震災害，疾病災害の6つにわけて構成されている。各項目ごとに，災害碑の所在地，拓本からおこした碑文に，読み下し文と注釈を付け，理解しやすいようにまとめられている。欲を言えば，地形図上に碑の位置を示していただきたかった。読者はより想像を膨らますことができたであろう。

本書には66点の災害碑が収録され，この内訳は洪水災害30，火山災害15，気象災害10，旱魃災害5，地震災害4，疾病災害2である。洪水災害の碑が最も多く，江戸時代には庄内古川・古利根川・元荒川・綾瀬川・荒川などが流れた埼玉県の地域性をよく示しているといえるであろう。

洪水災害の碑は寛保2年（1742），天明6年（1786），弘化3年（1846），安政6年（1859）の洪水に対するものが多いと指摘されている。なかでも寛保2年の災害碑は6点にのぼる。本書に収録された災害碑の建立年をみると，寛保3年が最も古い。これは，災害碑を建立する契機となったのが，寛保2年の大洪水であったことを示唆しているのであろうか。

寛保2年は大雨が降り続き，5月と8月に関東ならびに信州の諸河川が氾濫をおこした。この災害復興のために，幕府は破損個所の修復を西国筋の諸大名に命じた。いわゆる大名手伝普請である。採拓不許可のため本書では割愛されているが，北葛飾郡鷲宮町の鷲宮神社に残る石灯籠の「寛保治水碑」は，翌3年毛利藩主が奉納したものとして知られている（『鷲宮町史 史料2近世』に関連文書所収）。また，寛保2年の災害碑として，天明8年建立「奥貫友山墓碑」が収録されている。奥貫友山は荒川右岸に位置する川越藩領久下戸村（川越市久下戸）の名主であり，和歌や儒学を学んだ知識人であった。洪水の状況や救済活動などを克明に記した「大水記」（『日本農書全集67 災害と復興2』所収）を残したことでよく知られている。

天明6年の災害碑も5点と多く，寛保2年とならんで，江戸時代における関東諸河川の大洪水として認識されていたものと思われる。この治水の任にあった幕府勘定奉行安藤惟要の善政を追慕した記念碑も羽生市中央の神明社に残されているという。

このような著名な碑のみならず，本書には水死馬の供養塔，荒川段丘崖に増水した水位を示すために刻まれた「水」の文字（秩父郡長瀞町野上下郷）など，知られざる災害碑も収録されており，興味深い。

気象災害の碑として，天明飢饉3点，天保飢饉7点の計10点が取り上げられている。これらは飢饉の救恤を行った功績を讃えたものが多い。深谷市横瀬の華厳寺にある「荻野七郎兵衛繁数の墓碑」，与野市本町の長伝寺にある「西澤礦野墓碑」，秩父郡両神村小澤口にある「甲源一刀流祖逸見先生壽碑」は天明飢饉，越谷市瓦曽根の観音堂にある中村幸次郎の事績を伝えた「御貸付金請取証文写の碑」，鴻巣市本町の勝願寺の「福島耕八貞雄墓」，熊谷市集福寺の吉田宗敏の功績を讃えた「瑤泉吉田翁墓喝銘」，行田市小針の神仙寺にある「田島新六墓碑」は天保飢饉に関するものとして，採拓されている。

こうした顕彰碑以外にも興味深い碑が取り上げられている。たとえば，比企郡小川町勝呂の天保13年（1842）「飢饉警告の碑」には，天保7年は「従初夏至于季秋雨浸淫無休冷気凄然」という気候であり，「五穀不熟菜蔬不長物価騰躍庶民阻餓未」とその窮状を記し，飢饉への備えが必要であることを力説している。

火山災害の碑15点は，いずれも天明3年(1783)の浅間山噴火に関するものであり，かつて菊池万雄先生が浅間山噴火の研究のなかで金石文の分布に触れられたことが思い起こされる。本書でも災害碑の分布は利根川沿いに集中しているとあらためて指摘されている。この災害碑の分布傾向は，噴火によって塞がれた利根川が氾濫したためと考

えられるのではないだろうか。

また，これらのなかには当然のことながら天明飢饉と区別しがたいものもある。たとえば，熊谷市下奈良の豪農であった吉田宗敏の父宗敬の「吉田宗敬墓碑」は，浅間山噴火のみならず，天明から文化期までの事績を網羅している。また，越谷市瓦曽根の照蓮院にある「宜秋雲児自休居士墓碑銘」は，中村重梁の一代記の内容を呈している。本書ではいかなる災害かを基準に分類しているが，この例のように顕彰や築堤・改修記念などの建立目的で分類し直し，金石文の内容を再検討してみることも必要であろう。

火山災害の碑に分類されたなかで，幸手宿の有力者21人が窮民に70日間ほど食を供したことを讃えた幸手市正福寺の「義賑窮餓之碑」は，短文ながらも噴火の様子などを簡潔に記し，興味深い内容である。

旱魃災害の碑は5点と少なく，承応2年(1653)，明和8年（1771），文政4年（1821），文政9年（1826）の旱魃に関する碑である。承応2年から数えて二百三十三回忌にあたる明治19年に建立された「水行様」，明和8年の旱魃について記した坂戸市泉町の「粟生田堰改築記念碑」と久喜市江面の久伊豆神社「手水石の碑」，比企郡滑川町伊古神社の「雨乞碑」は文政4年，越谷市久伊豆神社の「久伊豆明神感應之碑并銘」は同9年の旱魃の碑である。

地震災害の碑4点は，いずれも安政2年の江戸大地震に関するものである。このため，埼玉県では南部に分布していることが指摘されている。

疾病災害の碑は2点。うち1点は天保6年（1835）痘瘡（天然痘）の流行を防いだ医者を顕彰した秩父郡吉田町上吉田の「静斎新井處士之墓」である。もう1点は同8年の比企郡小川町大塚の「天王社の碑」であるが，風化が激しく採拓できなかったという。それでも一部解読されており，著者の苦労がにじみ出ている。

以上のほか，本書には前述した奥貫友山のほか，明和4年の治水に資財を投じて「徳川実記」にも記された新井孫助（草加市氷川町），天保飢饉に際して「贍民録」を著した福島耕八（鴻巣市，勝願寺墓地）など，注目すべき人物の金石文が数多く収録されている。これら地域の偉人・功労者の墓碑は，学校教育の教材としても活用しうるであろうし，活用されているものと思われる。

しかし，災害碑建立の目的には個人の功績を美化して讃えたものが多いと考えられ，必ずしも客観的な内容とはいえない一面もある。また，後年に建立された例も多く，これらは同時代資料ほどの信憑性に欠けるきらいがある。したがって，金石文の内容を鵜呑みにすることはできない。とはいえ，被災者あるいはその子孫の災害碑を建立した意図を正しく把握し，事実としてよりも，災害に対する意識を考察する材料として，金石文は貴重な資料となりうるかもしれない。すなわち，環境認知論による災害研究の資料として解読しうる可能性を含んでいるのである。

歴史災害の研究視野を広げるうえで，本書のような地道な収集調査による資料の蓄積がさらに必要であり，これを成し遂げた著者に心より敬意を表したい。

（小野寺淳）

金田章裕著：『古代荘園図と景観』

東京大学出版会　1998年10月

A5判　368頁　本体6,400円

本書は著者の古代荘園図研究に関する論文をもとに，研究全体における位置づけを加え，まとめられたものである。出版から時間を経ての紹介となってしまったが，本書に関連して，『古地図からみた古代日本―土地制度と景観―』が1999年8月に中公新書として出版され，一般には知られることの少なかった古代の大縮尺の荘園図について，興味深く解説されていることもあわせて紹介しておきたい。

本書の表題にもある「古代荘園図」とは，現存する古代の地図の総称である。日本に伝存する8・9世紀の古地図は，詳細に土地や景観を表現した大縮尺の地図であり，荘園の田畠などを表現するために作成されたものが多く，一括して「古代荘園図」と総称されている[1]。本書の構成は，序章が「古代荘園図への接近法」，第1章が「古代の土地管理と荘園図」，第2章が「古代荘園図の景観表現」，第3章が「古代荘園図の機能と表現法」，第4章が「古地図の機能と表現対象」となっている。

序章では，本書および著者の研究的視角について説明がなされる。まず古地図研究における古代荘園絵図の位置づけを整理し，それまでの「中世荘園図の一要素」としてではなく，「古代の地図群の一部」として扱うことを確認している。このことが本書の重要な意義でもあり，全体を貫く姿